

【書評】

副田あけみ 著
『多機関協働の時代
—高齢者の医療・介護ニーズ，分野横断的ニーズへの支援—』

(関東学院大学出版会，2018年，A5判，282頁，3,000円+税)

村 社 卓
(岡山県立大学)

著者の専門は、ソーシャルワーク論、高齢者福祉論である。著者は、「ゴールドプラン（1989）」により創設された在宅介護支援センターに期待と関心を寄せ調査研究を行ってきた。その後も、「対人間・職種間・組織間の協働」「多機関協働」「多機関ネットワーク」等の研究を行っている。在宅介護支援センターの諸機能は、まさに「多機関協働の実践」なのである。加えて、在宅介護支援センターの職員が支援に困難を感じる事例として、高齢者虐待事例にも関心をもち、対応方法、虐待防止システムづくりについても研究テーマとしてきた経歴をもっている。

本書『多機関協働の時代—高齢者の医療・介護ニーズ，分野横断的ニーズへの支援—』は3部から構成されている。第I部では、多機関協働の推進について、国の高齢者ケアのサービス・デリバリー戦略を通して論じている。加えて、多機関協働を具体的に展開する主体としての多職種チームと多機関チーム、その方法であるチームワーキングについて論じている。第II部では、上記のチームワーキングを効果的に推進する要因について確認している。そして、第III部では、ネットワーク型チーム（多職種チームと多機関チーム）における利用者参画について論じている。

この構成からもわかるように、本書は3つのテーマについて論じている。つまり、①政策によ

って規定される多機関協働のありようについて、②多職種チーム・多機関チームのチームワーキング促進要因について、そして、③多機関協働における利用者参画の促進方法について、である。

著者の長年の関心であり続けた多機関協働について、3つのテーマに焦点を当てて論じたのが本書である。

本書の意義は次のとおりである。

医療・介護ニーズをもつ高齢者、分野横断的ニーズをもち孤立する高齢者が増えていく超高齢社会では、多機関協働が標準的な支援スタイルとなる。様々なニーズや問題を抱える高齢者に対して、「複数の異なる機関と一緒に支援する」多機関協働の推進は国の政策でもある。例えば、『我が事・丸ごと』の地域づくり推進事業実施要領でも、「多機関の協働による包括的支援体制構築事業」が強調されている。

本書は、その効果的な方法・スキルは何か、利用者参加はどうあればよいのかについて、政策の流れと支援の実際を踏まえて論じている。まさに、高齢者の医療・介護ニーズ，分野横断的ニーズへの支援を目指す「多機関協働の時代」において相応しい著書である。多機関協働の視点から、高齢者の医療・介護ニーズ，分野横断的ニーズへの支援内容について、初めて論じた本書の意義は大きい。

地域で高齢者の生活を支援するソーシャルワーカーやケアマネジャーにとって、優先度の高いのは、利用者・家族を専門機関の協力によって支援する多機関協働の理解と実践である。多機関協働の中心はケアマネジャーであり、ソーシャルワーカーである。本書はソーシャルワーカーやケアマネジャーの期待にも十分に応えるものである。

ところで、評者の専門はソーシャルワークとフィールドワークである。これまで「知的障害者の就労支援」「ケアマネジメント」「高齢者ボランティア」の領域でフィールドワークによる研究を行ってきた。「ケアマネジメント」に関する研究では、その特性として「チームマネジメント」に注目し、ケアマネジャーによるチームマネジメントの構造とプロセスについて明らかにしたことがある。特に、サービス担当者会議を典型的なフィールドとして、リーダーシップおよびチームワーク概念を用いて明らかにしている。したがって、この書評では、本書の中核部分でもある第Ⅱ部の「多職種チーム・多機関チーム」の内容に焦点をあてて論じることにする。

本書を読んだ最初の印象は、何よりも「理解しやすい」ことであった。社会福祉士養成教育においても、専門職間のチームアプローチとしての「連携」「協働」の実際については、学生に教えるのが困難な箇所である。本書では、ソーシャルワーク現場における「連携」「協働」の内容に関して、基本用語の定義など、その根拠も含めて丁寧に説明している。そのため、理解しやすい内容となっている。研究書としてだけでなく、福祉専門職を目指す学生の教育書としても役立つのではという印象を受けた。

本書の特徴は、前述したように、基本用語、モデル等の定義、分類、枠組みについて、欧米での研究成果も十分に踏まえ、根拠となる多くのデータの提示により、丁寧に整理しているところである。

「多職種チーム・多機関チーム」に関する研究は、日本では乏しいため、多機関協働を推進する政策を採用し、研究蓄積が比較的豊かなイギリスにおける研究成果に基づいて、様々な角度からの

比較を行っている。また、「多機関協働モデル」等、モデルについても同様に丁寧に整理している。さらに、関連図の作成により読者の理解を促進している。

本書において提示された研究成果への評価は、評者の関心からするならば、下記の2つの内容について、イギリスにおける研究成果を中心に、膨大な文献データを用いて明らかにしていることである。

ひとつは、多職種チームの成果である、課題達成、利用者満足、メンバーの肯定的体験といったチームパフォーマンスは、十分なコミュニケーションとメンバー間の相互理解、チームアイデンティティが醸成されているチームワーク、明確な目標の共有および役割曖昧化が進展するタスクワークが相互に関連しながら進行することでもたらされる、ということである。そして、チームアイデンティティは、「チームの協働を促進し、共通目標の認識を強化」することで、効果的なチームワーキングに寄与するものであり、専門職アイデンティティにこのチームアイデンティティを加える必要がある、と指摘したことである。

いまひとつは、上記の成果を踏まえて、高齢者虐待防止アプローチとして、利用者参画による「AAA多機関ケースカンファレンス・シート」を作成し、その後も「シート」を改良し続けていることである。この「シート」は、主担当者の関わり方が難しい事例、関係形成が困難な複合問題事例といった、「支援困難事例」への活用を目指すものである。

次に、本書での研究成果に関する評者の意見を述べておきたい。

本書では、イギリスでの研究成果に基づき、効果的なチームワーキングの促進・阻害要因を整理している。多機関協働の促進要因としての「役割曖昧化 (role blurring)」は本研究の重要なキーワードである。「役割曖昧化」は「専門職境界超え」と同義である。それを促進要因とすることには反対意見があるものの、重要な要因として位置づけている。加えて、「役割曖昧化は成長の機会という認識」という指摘も重要である。

しかし、この「役割曖昧化」は最初からメンバーに認識されるものではない。チームの活動継続に伴い、段階的に認識されるものではないだろうか？

評者はこのことについて、ケアマネジャーを例にとって、メンバーどうし役割を交替する「役割の交替」が推進要因となることを指摘している。具体的には、「役割意識の変化」「責任の分散」「役割の相互補完」によるものである。そのためには、リーダーシップとメンバーシップの双方がメンバーには必要であり、両者は相互関係にある。

「役割の交替」の前提として「役割分担」という作業がある。「役割分担」は自らの役割を自覚し、周りからの信頼を得るうえで重要である。「役割分担」を前提として、常にお互いに相手の状況を確認し合い、相手にサポートが必要な場合、臨機応変にその役割を他のメンバーが補い合う「役割曖昧化」が登場するのではないだろうか？

これは、メンバー間の「役割」の位置づけが、チーム活動の推進のなかで変化することを意味している。評者の研究でも、「役割分担」はチームの活動推進において、専門職自らの役割、自分への周りの期待を確認するうえで、重要な機能を有していた。そして、「役割分担」は、その後「曖昧なもの」へと変容することになる。専門職どうしが協働するうえで、つまり、利用者により良いサービスを提供するために、また、自分が無理なく活動を継続するためにも、柔軟な位置づけを必要とするのである。

最後に、今後の著者の研究について要望を述べおきたい。

本書で取り上げたのは「専門機関間の協働」である。そして、多機関協働における利用者の参画も強調している。このように、住民の積極的な参画による多機関協働は重要である。加えて、「専門機関間の協働」の実現には、専門職と地域住民の間を取り持つボランティア活動への注目と、彼らとの協働も必要となるのではないだろうか？

高齢者にとって「近い」相談援助機関は必須で

ある。物理的には「通える距離にある」「途中坂道のない」場所が必要となる。また、心理的にも「敷居が低い」「何でも話せる」場所の提供が必要となる。特に、心理面での実現には、専門機関どうしの協働だけでは無理がある。利用者のニーズと専門機関によるサービスを「つなぐ」「橋渡しをする」ボランティアの存在が必要であり、専門機関とボランティア団体との協働が課題となる。「住民にとって身近なところに開設され、専門職が必要に応じて家庭に出向き、相談に応じる」のが、在宅介護支援センター（現在の地域包括支援センター）であり、その機能を十分に活かすためにもボランティア活動との連携が必要となるように思われる。

本書は、多機関協働の重要性とともに、その実践の難しさや課題についても教えてくれている。本書は、現時点における「対人間・職種間・組織間の協働」「多機関協働」「多機関ネットワーク」研究において、ひとつの到達点と言えるものである。そして、これからの高齢者福祉を考える手かかりとなる重要な著書である。近い領域で仕事をしている評者にとっても、本書から多くのことを学ばせていただいた。

介護保険制度下におけるケアマネジメントは「ひとり」ではなく「チーム」で行うものである。その中心がケアマネジャーである。ケアマネジメントの特性は、「サービス」「業務」「チーム」の、3つの「マネジメント」として理解することができる。特に、「チーム」のマネジメントは重要であり、それは「サービス」としての「調整・仲介」、「業務」としての「給付管理」の効力をそれぞれ増強させるものである。多機関協働の研究は、正にケアマネジメントにおけるチームマネジメントの研究に他ならない。

多機関協働研究の第一人者として、著者の研究成果の発表をこれからも望みたい。また、多機関協働の実現に向けて利用者の参画は不可欠である。著者が現在直接関わっている「安心づくり安全探しアプローチ」および「AAA 多機関ケースカンファレンス・シート」を用いた実践に関する研究報告についてもぜひお願いしたい。

引用文献

村社 卓 (2012 a) 「チームマネジメントの未活用要因
および活用条件—ケアマネジメント実践における
チームマネジメント機能の検討」『社会福祉学』53

(2), 17-31.

村社 卓 (2012 b) 『介護支援専門員のチームマネジメ
ント』川島書店, 全 222 頁.